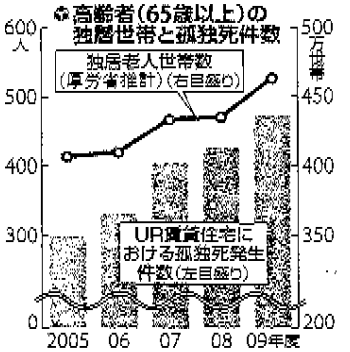
親族すら かかわり拒否

行き場なき遺骨

不明 高齢者 3



葬送支援ネットワークの事務所では、お盆に引き取り手のない遺骨がひっそりと供養された(14日、さいたま市で)

白い布をかけただけの長机が「5人」の祭壇だった。

さいたま市内にある「葬送支援ネットワーク」の事務所の片隅。14日午後4時頃、僧侶の中下大樹さん(35)が手を合わせたのは、東京都内で亡くなった後、親族に引き取りを拒まれた70～80歳代の男性5人の遺骨だ。行き場を失った遺骨を預かるこの組織を昨年設立した中下さんは、力無くつぶやいた。「家族の絆が切れると、最後はこうなるんでしょうか。今日はお盆なのに……」

東北地方の人口約1万人の町で福祉業務を長く担当する男性職員は、昨夏の体験を忘れられない。60歳代の男性が自殺し、親族5人に遺体の引き取りを頼んだ時のことだ。全員が「かかわりたくない」と断り、何度説得しても、誰一人、遺体に対面することはなかった。男性は結局、引き取り手のない「行旅死亡人」扱いで火葬され、遺骨は「無縁仏」として寺の共同墓地に葬られた。「寂しく、むなしい気持ちになった」。職員はそう振り返る。

読売新聞の全国調査で判明した「行旅死亡人」は、2009年度までの3年で計3000人を超えていた。それらの遺骨に手を合わせる親族はいない。

◇

不明高齢者問題は、家族間で進む「無縁化」も深く関係している。

65歳以上の高齢者が住民の半数を占める東京・新宿区の都営戸山団地では、最近死亡した60歳代の独居男性が、死亡から約5か月間、誰にも気付かれなかった。同団地で高齢住民支援を続けるNPO法人の本庄有田会長(72)は「年間10人はいる」と推測する。

厚生労働省の推計では、65歳以上の独り暮らし世帯は09年度、約463万世帯に上る。孤独死について、公営住宅の全国統計はないが、都市再生機構(UR)によると、同機構が管理する賃貸住宅では、65歳以上の高齢者の孤独死がこの10年で約5倍に増えた。

◇

「死んだ時、どこの誰かもわからないのは嫌ですから」。建設業の職を失い、今月から東京・上野公園でホームレス生活を始めた男性(63)は16日夕、公園のベンチに座り、そう話した。

30年前に上京したが、15年前に妻子と別れ、親族とは音信不通だ。札幌市の実家にいるはずの両親は、生きていれば92歳だが、実家の電話番号も忘れてしまったという。カバンの中には、以前住んでいた千葉市の住民票がある。死んだ後、戸籍上生き続けるような事態にはなりたくない――。そう感っている男性は不明高齢者問題について、「ひとごとではない」と語り、深いため息を吐いた。

都内のホームレス支援団体「新宿連絡会」によると、新宿中央公園で今年2月に調査したところ、約400人のホームレスの約4割が60歳以上だった。家族がいったん連れ戻した男性が、すぐに戻ってきたこともある。同会の笠井和明代表(48)は「家族との関係が修復しない限り、家に帰っても意味がないケースもある」と言う。

読売新聞の調査では、自治体が親族と連絡が取れても、親の安否を長年知らなかった例は少なくない。

富山県高岡市の寺院には、全国から引き取り手のない遺骨が送られてくる。その供養を続ける住職の栗原啓充さん(51)は、問題をこうみている。「どんな理由があるにせよ、家族の絆が細ったのが最大の原因。遺骨を見ていると、そうとしか考えられない」

地上デジタルは日本アンテナ